

冬どり、春どりの作型に適する。葉長が長く、葉数が多い。7～8月上旬の早い植え付けをする場合は、高温処理により種球の休眠を打破する。

熊本わけぎ2号：梅雨期を除く、春先から冬季までの栽培に適し、種球の休眠が浅いため初夏どりが可能である。平坦地では、6月収穫を中心に、栽培が不可能な時期がある。葉は細く、葉数と分けつ数が多く、特に春先は多収性である。

熊本わけぎ冬：厳寒期でもロゼット化せず、1～2月の収穫が可能である。

下関：葉はやや細く、葉身の中央部から先端にかけて細くなる。鱗茎が薄いので調整作業が容易である。

寒知らず早生：葉の中央部は細く、葉先にかけて細まる。草姿、葉色は優れている。低温期でも葉先の枯れ込み、葉折れが少なく、低温伸長性がよい

寒知らず晩生：低温伸長性に優れ、3～4月出荷の作型に適している。

長崎大玉：秋どり栽培では、株の開きが大きく葉がねじれる。春どり栽培に適する。

木原早生：鱗茎は小さく、細長い。冬季の草勢は寒知らずより弱い。秋どりの晩秋収穫に適する。

2 種球

種球の必要量は、秋冬どり、夏どりは10a当たり60～100kg、春どりは50～80kgである。

3 植付期

秋冬どり栽培は8月下旬～10月中旬植え付け、11月～3月収穫、春どり栽培は10月下旬～12月中旬植え付け、3月下旬～5月中旬収穫。

4 種球の調整

掘り上げた後に風通しのよいところに貯蔵しておいた種球をとりはずし、夏の陽光に半日ほどさらす。外皮はぎをしやすいするため、手で揉んで荒皮を取り除く。小球で2～3個、大球で1個ずつ発根部を均等に付ける。スポンジ状になったものやアメ色になったものを取り除く。

5 植付準備

完熟堆肥(10a当たり3～4t)と基肥を早めに施用して深耕する。冬季の栽培では、地温を上げるため黒マルチを用いる。

6 施肥

ワケギの幼根は濃度障害をおこしやすいため追肥に重点をおいた施肥を行う。追肥の量は1回当たり窒素成分で2～3kg/10a、苦土石灰は土壌分析に基づき50～100kgの範囲で施用する。

施肥基準 (kg/10a)

成分	総量	基肥	追肥	追肥回数
基肥	15	17	15	5回～6回
追肥	15	3	15	
合計	30	20	30	

7 栽植様式

栽植密度	(cm)	
	条間	株間
秋冬・夏どり	60	20
春どり	60	25～30

8 植付作業

植付にあたっては、植付深さ6～9cmの作条を切り、種球が1/4程度上に出るようして植え付ける。栽培期間の短い作型は分けつが少ないので多く植え込む。

9 植付後の管理

(1) 追肥、中耕

肥切れすると葉の色が悪くなるだけでなく、病害にも侵されやすくなるため早めに追肥を行う。

追肥は、草丈15～20cmのときに1回目を行い、その後2～3週間の間隔で行う。追肥後に、除草と中耕とをかねて軽く土寄せを行う。

(2) 灌水

8月～9月の高温時には、灌水して乾かさないうにする、この時期に乾燥させると、葉鞘基部が肥大して商品性を低下させる。

10 収 穫

草丈が40～45cmに伸長して株張りの良い株から順次抜き取り調整する。収穫時期が早すぎると、株張りが悪く収量があがらない。また、逆に遅すぎると、葉鞘基部がラッキョウのように肥大して商品性が低下する。